

1か月児の泣きに対する母親の困難感尺度の開発

著者	田淵 紀子, 島田 啓子, 亀田 幸枝, 関塚 真美, 坂井 明美
雑誌名	日本助産学会誌 = Journal of Japan Academy of Midwifery
巻	18
号	3
ページ	138-139
発行年	2005-01-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/34871

doi: 10.3418/jjam.18.3_134

1 か月児の泣きに対する母親の困難感尺度の開発

金沢大学医学部保健学科 ○田淵 紀子
" 島田 啓子
" 亀田 幸枝
" 関塚 真美
" 坂井 明美

I 緒言

子どもの泣きは、育児ノイローゼや虐待を生じさせる危険性につながることもあり、このような状況を予知し、育児困難感や不安の軽減に貢献できるケアへと活用することが急務である。これまでに、子どもの泣きに対する母親の困難感の実態と困難に関連する要因などを縦断的に明らかにしてきたが、今回、1ヵ月時点での子どもの泣きに対する母親の困難感尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。

II 方法

1. 調査対象：北陸地方における病産院にて出産後、1ヵ月健診に訪れた母親

2. 調査方法：自己記入式質問紙調査を承諾の得られた26出産施設において、研究目的および調査回答が健診および医療者の対応等に影響しない旨の説明を書いた文書を添えた質問紙調査を配布し、記入および郵送による返信を依頼した。

3. 尺度の作成プロセスと調査で採用した測定尺度：これまでに行なってきた母親に対する面接と生後1ヶ月、4～5ヶ月、1年時の縦断的調査の結果より、母親の育児困難な状況やそれに関連する要因を整理し、泣きに対する育児困難感の概念枠組みを検討した。育児に関連した既存の尺度について文献検討を行い、Parenting Stress Index (PSI) 日本版を参考に、子どもの泣きに注目した尺度項目を検討した。本尺度は、子どもが泣くことによって、母親が育児に対する困難な感情や負担に思うなどのストレスの程度を測定しようとするものであり、母親の育児に対する考え、泣きに対する思いや対処時の困難等17項目とした。それぞれの項目に対し、困難に感じる程度を4段階リッカート尺度とした。基準関連妥当性を検討するために、今回、感情・情動尺度(田淵他, 2000)より受容的情動、非受容的情動各々5項目ずつ計10項目に抜粋した尺度と既存のベックの抑うつ尺度第2版(以下、BDI-II)を用いた。感情・情動尺度の評定は“大体思う(1点)”～“ほとんど思わない(4点)”の4件法で、得点が高いほど受容的傾向を示し、普段子どもと接している時と子どもが泣いた時の2状況の気持ちについてそれぞれ設問した。内容妥当性を検討するために助産学研究者3名に意見を求めた後、乳児を持つ母親を対象に予備調査を行い、理解困難な文章表現を修正した。

4. 分析方法：統計解析ソフト SPSS11.5 Jを用いた。主因子分析法、Pearson's 相関係数を

求めた。

Ⅲ 結果

1. 対象の概要：調査用紙は700部配布し、366名から回収(回収率52.3%)した。有効回答は352名(有効回答率96.2%)であり、初産婦181名(51.4%)、経産婦171名(48.6%)であった。

2. 尺度項目決定のための分析

1) 項目分析：泣きに対する困難感尺度項目の回答分布に偏りがみられたのは1項目で、その他の項目はほぼ正規分布を示した。また、項目間で負の相関を示すものがないか確認した。

2) I-T相関分析：泣きに対する困難感尺度の項目間相関をみたが、 $r=0.8$ 以上で項目内容の類似しているものはなかった。また、尺度の各項目と全項目の合計得点の相関係数を求めたが、 $r=0.4$ 以下の項目が3項目みられたため削除した。

3. 尺度の信頼性と妥当性の検討

1) 因子分析：泣きに対する困難感尺度17項目のうち、項目分析とI-T相関分析により除いた14項目を採択し、主因子分析法、バリマックス回転した結果、固有値1以上の3因子が抽出されたが、因子負荷量が0.4以下の1項目を削除し分析した。第1因子は5項目からなり、「育児に対する思いと見通し」、第2因子は4項目からなり、「泣きの対応と育児の自信」、第3因子は4項目からなり、「泣きの受けとめとストレス」と命名した。第1因子の寄与率は30.0%、第3因子までの累積寄与率は40.2%であった。

2) Cronbach's α 係数による信頼性：因子分析から選択された13項目の α 係数は0.83であった(第1因子 $\alpha=0.74$ 、第2因子 $\alpha=0.74$ 、第3因子 $\alpha=0.60$)。

3) 基準関連妥当性：「BDI-II」との相関については、 $r=0.450, p<0.001$ と有意な正の相関を示した。「感情・情動尺度」($\alpha=0.85$)との相関では、子どもが泣いた時の情動とは、 $r=-0.646, p<0.001$ と有意な負の相関を示した。また、普段子どもと接している時と子どもが泣いた時の情動得点の差が大きいほど、困難感尺度の得点が高かった($r=0.467, p<0.001$)。

Ⅳ 考察

本尺度の信頼性と妥当性の検討により、内的整合性、構成概念妥当性、基準関連妥当性が確認できた。PSIは親の育児ストレスを測定するものであるが、今回開発した尺度は、子どもの泣きに対する母親のストレスに焦点をあて項目を選定した。また、育児不安の本態は育児困難感であり、子どもへのネガティブな心的態度、感情から成ると言われている(川井他, 1997)。今回開発した尺度は、特に子どもの泣きに対する母親の困難感に焦点をあてたものであり、川井らの育児困難感の内容と一部類似しているが、尺度構成はより精選されたものであり、さらに1ヶ月時期に焦点を当て測定できるという活用性がある。したがって、子どもが泣くことで母親が育児を負担に感じたり、困難な感情やストレスフルな感情を抱く状況にあるかどうかを測定する尺度として、臨床への適用の可能性が考えられる。

Ⅴ 結論

1) 今回開発した子どもの泣きに対する母親の困難感尺度は、13項目から構成された。

2) 本尺度の信頼性と妥当性は、おおむね高い信頼性と妥当性が得られた。